

句集

夏  
帽  
子

西  
村  
宏  
虎



## 序

宝塚の西村宏虎さんが第二句集を出されることになった。今回は、みのる選に入選された作品が中心である。

宏虎さんとはインターネット句会のメンバーとしてご縁が生まれた。仕事の都合でサイトの運営を休止せざるを得なくなったとき、関西エリアの仲間が協力して活動を続けて下さった。ウェブサイト『ゴスペル俳句』の活況が今日あるのは、この時期を耐えてグループを牽引してくださった宏虎さんのお陰なのである。

妻に多謝長寿に感謝文化の日

夏帽に妻十歳は若返り

これらの作品からは仲睦まじいご夫妻の様子が垣間見える。グループの最高齢ながら誰よりもお元気なのは奥様の背後での応援によるところが大きいと思われる。作者も又それを認めて感謝しておられるのである。

カンナ燃ゆ男にもある嫉妬心

ここだけの話に倦みし日向ぼこ

宏虎さんの作風は風刺のきいた主観句が特徴でそれがまた個性となっている。それ故にやむを得ないことではあるが自然を詠むことは苦手のようで、どうしても吟行句会では苦吟されることが多い。それでも懸命に努力され、かかる佳句があることを紹介しておきたいのである。

水あやす如くに紙を漉きにけり

雲の峰見よやポパイの力瘤

晩年の阿波野青畝師は数多の吟行体験から記憶を引き出しては句作しておられた。年齢を重ねながらも私達にはまだまだ健康が与えられています。感謝しつつ吟行に励み一日でも長く元気に俳句ライフを楽しんでいきましょう。宏虎さん、先陣の旗を掲げて頼みますよ。

平成三〇年六月吉日

やまだみのる



每日句会入選句



添書きに辛苦見えたる年賀状

連鎖せる不満の愚痴や女正月

雪見酒して至福なる露天風呂

黒潮へ絶壁なせる水仙郷

老いらくの恋など期待初みくじ

屠蘇祝ふダイヤ婚なる共白髪

鰭酒に酔ひて毒舌はばからず

たわいなき話肴におでん酒

枯蘆や遊里の昔語り草

石庭の波の箒目紅葉散る

山上の古刹の殊に紅葉濃し

トンネルを抜けて展けし豊の秋

木の実落つ城の二の丸三の丸

運動会招待席に忘れ杖

武蔵坊少し痩せしと菊足しぬ

鬼やんま竹馬の友を思ひけり

満天の星に安堵や台風過

高鳴れる水の匂ひに稲実る

起伏野の続く限りに蕎麦の花

朝市に並ぶ露けき野菜かな

竹春の嵯峨野を駈けて人力車

宿下駄で外湯巡りす星月夜

カンナ燃ゆ男にもある嫉妬心

島の宿降り注ぐごと天の川

夕焼けて金波銀波の琵琶湖かな

花八つ手目隠しなせる外厠

修験者の錫杖ひびく秋山路

核  
心  
の  
話  
に  
止  
ま  
る  
扇  
か  
な

山  
襖  
く  
つ  
き  
り  
見  
せ  
て  
月  
今  
宵

峡  
の  
宿  
庭  
下  
駄  
露  
を  
置  
き  
に  
け  
り

ビル街の細き辻裏地蔵盆

暗闇にどよめく声や大文字

夏帽子余生といへど予定多々

浜木綿や沖へま向きし遭難碑

水鉄砲爺の笑顔に命中す

刻を告ぐ魚板の音も梅雨じめり

万緑の峪の深さやかづら橋

子燕の貌より大き口開く

簾越し三味の音洩るる祇園かな

下  
闇  
の  
延  
命  
水  
に  
行  
列  
す

満  
天  
の  
星  
へ  
紛  
れ  
し  
恋  
螢

さ  
く  
ら  
ん  
ぼ  
お  
ち  
よ  
ぼ  
口  
し  
て  
種  
を  
吐  
く

ミサの鐘四方にこだます万緑裡

金婚の妻に感謝し新茶汲む

嬰兒の大きな欠伸聖五月

花筏かき分け進む屋形船

ロープウェイ花のお山を二分けす

青空へ高梯子かけ剪定す

摩尼車止まる間のなき彼岸寺

さざ波に見え隠れする蘆の角

手庇に仰ぐ蒼天揚雲雀

川面はや一閃二閃初燕

溪声の高鳴りて山覚めんとす

首尾問へば多分と笑顔大試験

老禰宜の妙なる笛や里神楽

去年今年跨ぎ八十路の峠越ゆ

金釘の癖字でわかる年賀状

一願の柏手高く初詣

数え日やデマに花咲く散髪屋

枯蓮のうち伏して池昏れなんと

頑として寡黙決め込む懐手

水あやす如くに紙を漉きにけり

着膨れてゐてもお洒落はな忘れそ

矢のごとく鳥影よぎる障子かな

席譲りあへば知己めくおでん酒

木の葉髪訥弁なれど聞き上手

せせらぎに日の斑の躍る紅葉晴

浮寝鳥波間に揺れて池暮るる

落葉舞ふ耳朶の大きな石仏

沖遠く漁火せめぐ十三夜

歳時記を座右としたる秋灯下

戦国の武者勢揃ひ菊人形

秋を聞く千年杉をうち仰ぎ

投句箱溢るるほどや小鳥来る

首塚のそびらの山に鴟猛る

爽やかや手話の会話の笑みもまた

写経場の静けさ破り鴉高音

露けしや肩を寄せ合ふ無縁仏

萩の叢十重に二十重に枝垂れけり

読書妻生返事する夜長かな

恙なく歩ける感謝お花畑

日を弾く綺羅の川波鮭のぼる

愛犬が水先案内露の径

試食させられて買ひたる西瓜かな

鬼瓦強き西日を避けられず

常濡れの三和土涼しき魚市場

温泉の街の川沿ひの道星涼し

夕焼けに染まる岬の白灯台

百度石灼けて人影みあたらず

遊船の曲がりて景色一変す

雲の峰へと機首立てて飛機離陸

昏れなんとしてなほ白き花菖蒲

雲の峰見よやポパイの力瘤

夏蚕食む命の音や小屋更くる

春惜しむ枯山水に静心

水遁の術さながらに蝌蚪隠る

ネクタイの要らぬ余生の日々長閑

ぶらんこやベンチに二つランドセル

振り向けば陸遠くなる浅蜷掘

菖蒲の芽風いなしゐる汀かな

陽炎のなかより電車近づき来

いかなご船吃水深く戻りけり

盆梅展主宰す和服美人かな

笹鳴きの林に探すゴルフ球

恙無き余生に感謝小豆粥

去年今年八十路の夢を膨らます

ここだけの話に倦みし日向ぼこ

熱爛やあらぬ本音を聞く羽目に

文楽の泣くに泣かされ秋の人

妻に多謝長寿に感謝文化の日

千枚の棚田はいまし豊の秋

内海の一島しるき蜜柑色

菩提寺の大門開く秋彼岸

小説を一气読みせる夜長かな

鳥渡る寿永の悲話の海越えて

秋風裡文楽人形肩で泣く

書に倦みて蟲の音に耳澄ましけり

惨状に祈るほかなし秋出水

秋風に肩寄せあへる羅漢かな

味噌汁の熱きが美味し避暑の宿

語り部に耳かたぶけよ広島忌

万緑を砦としたる古墳かな

山椒魚岩に紛れて身じろがず

風鈴の上機嫌なる峠茶屋

大人びし娘眩しき更衣

起伏なす麦秋の丘夕陽落つ

春昼や妻の鼻歌階下より

長き足もてあましたる花筵

渦潮をまたぐ大橋鳥帰る

農道の轍ぐちやぐちや春の泥

大いなる雨の珠抱くいぬふぐり

日脚伸ぶ電波時計に狂ひなし

神杉の辺りを払ふ淑気かな

賜りし長寿に感謝初御空

子の寝顔サンタクロース疑はず

おでん酒意気投合し相識らず

道の駅葉つき大根山と積む

寒禽の鋭声こだます神の森

朝練の部活の子らの息白し

賓頭廬を撫でて一願木の葉髪

余生得てほ句に親しむ文化の日

秋霖に涙目となる街路灯

石塊と見たるは仏草紅葉

上皇の遠流の島や木の実落つ

露座仏に一茎手向く野菊かな

渦潮に揉まるる釣瓶落としの日

芒野に見え隠れする園児帽

正座して須臾に読経や盆の僧

里山の夕日かきまぜ赤とんぼ

雲海を抽ん出て富士高きかな

部屋の灯に玉砕せんと金亀子

縄暖簾ナイター帰り族で混む

水鉄砲出会ひ頭に打たれけり

時差ぼけを悟られまじとサングラス

鎮守社を要としたる青田かな

竿自慢して賑々し鮎の宿

ゆくりなく余花に出会ひし峠道

麦秋を分けて一輛電車ゆく

奥嵯峨の風騒がしき竹の秋

藤房に手の届きけり車椅子

綿菓子のごと蒼天の春の雲

冗談にしらけたる座や四月馬鹿

宵闇にひろがる花の白さかな

池の面に遊ぶ雲あり葦の角

陽炎ひて白線歪む野球場

黄水仙灯台の立つ岬鼻

春の山駱駝のこぶに似たりけり

大の字に寝ころべば草芳しき

春兆す潮入り川の匂ひけり

橋脚も折れよと激つ雪解川

神域に神鼓高鳴る四温晴

広鉢の白砂を割りて福寿草

明けの空われがちに翔つ初雀

切つ先の瑞々しさよ竹飾り

湯豆腐の味を問はるる京言葉

朝市の売手買手と息白し

底冷のうぐひす張りの廊巡る

鈍色に水錆びて蓮枯れにけり

耳遠く身ぶり手ぶりや日向ぼこ

散歩する主も犬も息白し

老吾を相哀れむか枯蟪蛄

夕帷払ひて白し花八つ手

肅々として銀杏散る御堂筋

仁王像泰然自若寒風裡

コーヒーの御代り所望秋の人

満ち足りし余生の秋を惜しみけり

捨てられし案山子存問する雀

鹿跳ねて角切りの勢子息荒し

と見る間に下界隠るる山の霧

波の綺羅揺らぐ川底秋澄める

蓑虫の糸一本の宇宙かな

露ふふむ朝とれ野菜無人店

西瓜切る子ら正座して侍りけり

晩鐘の嶺々に聳す古都の秋

墓洗ふ風樹の嘆を詫びもして

水を乞ふムンクの叫び原爆忌

月の出に合掌したる生身魂

洋館の白壁を背にカンナ燃ゆ

朝顔の明日咲く蕾数へもす

放牧の草食む牛馬雲の峰

句碑巡る吾を洗礼す蟬時雨

足跡を消すは渚の青葉潮

月涼し椰子の葉影の砂浜に

千枚を駈けめぐりをる青田風

滝壺の渦抜けてより水寧し

水昏れてより艶めける花菖蒲

水底に砂躍りをる泉かな

豪商の栄華を偲ぶ夏座敷

夏帽に妻十歳は若返り

恙なく歩ける至福若葉風

新緑の山ニ夕分けす高速道

ウインドウのマネキンもまた更衣

トンネルの出口を覆ふ若葉影

マリア像祈り佇む新樹影

昏れてなほ花菜明りの無人駅

囀りに朝のカーテン繰りにけり

墨  
絵  
め  
く  
古  
刹  
の  
山  
や  
鐘  
朧

罇  
の  
シ  
ャ  
ワ  
ー  
浴  
び  
る  
車  
椅子

い  
な  
な  
き  
の  
連  
鎖  
反  
応  
牧  
の  
春

展けたる菜の花畑に大水車

花屑を吐き出してをる水車かな

大楠は森さながらに百千鳥

春耕の土くれ匂ふ日差しかな

観梅や眼下にひかる茅渟の海

居酒屋の人気メニューは蒨の臺

下萌をスキップでくる女の子

沖遠く漁火一つ冴返る

村人ら総出に見守る野焼きかな

瀬音いま春の調べと覚へけり

瀧音に消ゆる経声寒行者

深雪積み過疎の一村眠るごと

断崖の怒濤がしぶく水仙郷

柚子風呂に瞑想せるが我が至福

雪吊りの男結びに気迫あり

師の一語励みとしたる事始

神庭に焚く櫓の灰白きかな

好日の野点に紅葉散りやまず

梵鐘の余韻  
嫋々山眠る

大空を睨みし  
鋭目や檻の鷹

嵯峨小春と行き  
斯くゆく人力車

塔見えて大本山の紅葉濃し

柚の径ここだ木の実のうち敷きて

吊り橋の半ばに佇ちて秋惜しむ

吊り橋のぐらり傾く紅葉峡

人影のなきログハウス小鳥来る

赤い羽根黄色き声が合唱す

日と土の匂ひを放つ捨案山子

農継がぬ子が率先し稲を刈る

爽やかや出迎へ人の島訛

我が前に揺れうしろにも秋桜

螭螂の前脚パントマイムめく

鰯雲沖の巨艦の動かざる

水底に日の綺羅揺るる瀬々の秋

裸婦像の全身濡るる月今宵

この良夜万葉びとを想ひけり

霧の山尾灯頼みの九十九折

さりげなく欠伸を隠す秋扇

分け入りて句碑に見ゆる萩葎

産声に歓声上がる望の夜

腰曲がる老婆が仕切る地蔵盆

馴れぬ手で赤子受け取る生身魂

白内障癒えたる今宵星月夜

書に倦みて窓開け放つ夜の秋

サーファアの消えては現るる波頭

遠雷の魁けの雨匂ひけり

尾瀬沼の木道に立つ雲の峰

この山の鼓動のごとく苔清水

砂浜に裸足投げ出す椰子の陰

梅雨空に墨絵ぼかしよ嵐山

定例句会入選句



春愁や水子地蔵に供華溢れ

安産のお礼を納む梅日和

磊々をあらふ清流風光る

嬰の笑み百面相や家の春

小豆粥俳句長者を願ひけり

一穢なき空へ万朶や冬木の芽

大滝のマイナスイオン深呼吸

緑化園奥へ奥へと青葉満つ

園めぐるとの径も草芳しき

滴滴と春の雨音くさり樋

さながらに炎の坩堝谷紅葉

重さうに雨粒やどすしだれ萩

帆柱の白直立す波止涼し

梵鐘をひと撞き暑気を祓ひけり

竹皮を脱ぎ散らしたる藪小径

若葉洩る陽の洗礼や古墳道

大岩を抱擁したる山つつじ

老幹の梅に勇気をもらひけり

供花はみな春の色なる水子仏

磴百段上りきつたる息白し

秋暑しバスの隣席太鼓腹

水墨の一幅めきて滝涼し

日の匂ふ地産のトマトまるかじり

若楓覆ふ奈落の瀬音かな

繚乱の百花に園の春惜しむ

つばくらめ一閃二閃空ま青

ぜんざいを食べておしやべり女正月

風遊ぶ音の序破急竹の春

枯蠶螂落武者然と身構へぬ

万緑を二た分けしたる一瀑布

掬ひ飲む延命水に汗ひきぬ

吹く風に火の粉高舞ふ薪能

千尋の谿へなだるる若楓

春の鴨仲良く尻を振りにけり

磊磊の瀬を過ぎてより水澄める

左見右見薬草園の草の実に

澄む水に魚影日の斑をまき散らし

草野球回し呑みする麦茶かな

花の昼窓から洩るる聖歌かな

初空へ前肢上ぐる神馬像

満面の笑みを添へたり福娘

一門の墓どころらし笹子鳴く

白障子過るは庭の鳥の影

風鈴の音に反応す猫の耳

夕焼を掬ひて上がる観覧車

碑の梵字をなぞる蜥蜴かな

ポンコツの山と積まるる枯野かな

群青の空悠然と鷹高し

大鷲の空傾けて急降下

霧襖晴れて展けし千枚田

似て似ざる五百羅漢の秋思顔

風一陣わたる夕日の芒原

春憂ふどころではなし大地震

この貌のどこにあの声猫の夫

翼船の飛沫窓打つ涼しさよ

饒舌組寡黙組あり川床に酔ふ

水馬ぶつかりさうでぶつからず

吊橋の揺れて万緑傾ぎけり

目を皿にして露の臺探しけり

吟行句会入選句



寒禽の鋭声訝す茶白山

異次元の景さながらに蓮枯るる

鴨をかし我もわれもと逆立す

自ずから芽立ちの遅速池めぐる

琴坂のせゝらぎを聞く秋意かな

川風に伏し止まざりし枯芒

礎 一歩一歩に愛でる散紅葉

春光に羽広げたる白孔雀

賀茂川の堰煌めきて水の秋

大原や秋さぶ庭を去りがたく

露けしやわらべ地蔵は苔まみれ

山門を凌ぐ大樹の樟若葉

宮うらら英語韓語の絵馬混じる

森林浴涼し疏水の楽もまた

展望台足下を埋む若楓

草の花古墳の口を彩りぬ

万緑を砦としたる城址かな

大滝の裳裾ひろげて落ちにけり

噴水の飛沫に匂帳濡らしけり

春陰に鎮もる村の古祠

朱の揺れて千本鳥居陽炎へり

月白や万葉人の詠みし丘

亀石を撫でて明日香の秋惜しむ

秋の蝶ついと消えたる草葎

豊の秋ひろごる中に飛鳥寺

石舞台そびらに歩む秋日傘

あめんぼう己の影とあそびけり

一水に黄を散らしけり濃山吹

菜の花黄賀茂の河原を埋めけり

茎立てる空に引力ある如く

一湾に漁火一つ冴えにけり

庭園を貫きて水澄めりけり

雪解水命得しごとたばしれる

書に倦みて一息入るる月の窓

超高層ビルより高く雲の峰

春愁や城趾の井戸に土詰まる

襖 絵の虎の眼光冷まじき

謎めきぬ古墳のいはれ小鳥来る

墨絵めく金剛の嶺々雁の秋

## あとがき

お勧めにより思いがけず第二句集を纏めることとなり嬉しいかぎりです。

ウェブサイト『ゴスペル俳句』とのご縁は平成十七年二月からでした。活動休止の期間もありましたが再稼働してからは西宮北口に句会場を定めて毎月定例会句会がもたれるようになり毎月の会場確保が私の任務になりました。

やがて吟行中心の活動となりお陰様で近在の神社仏閣や公園等を巡りながら仲間との親しい交わりが宝となりました。俳句を詠みながら歩くことにより適当な運動と脳の活性化も図れるので一石二鳥と感謝しています。

吟行は四季折々の自然や小動物の営みに心を通わせることで自分自身もまた生かき

れているという実感があります。また俳句をしている間は老いという意識を完全に忘れていたのです。私にとって俳句は健康と長寿のための一番の良薬、これからも余生の限り俳句を友として励みたいと思います。

最後になりましたが身にあまる序文を賜りました、やまだみのるさんと製本表装等の労をとってくださった有松せいじさんに心より厚くお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

西村 宏虎



『夏帽子』 西村宏虎句集

平成三〇年六月三〇日 印刷

平成三〇年六月三〇日 発行